

# 中華人民共和国の鉱山を訪ねて（2）

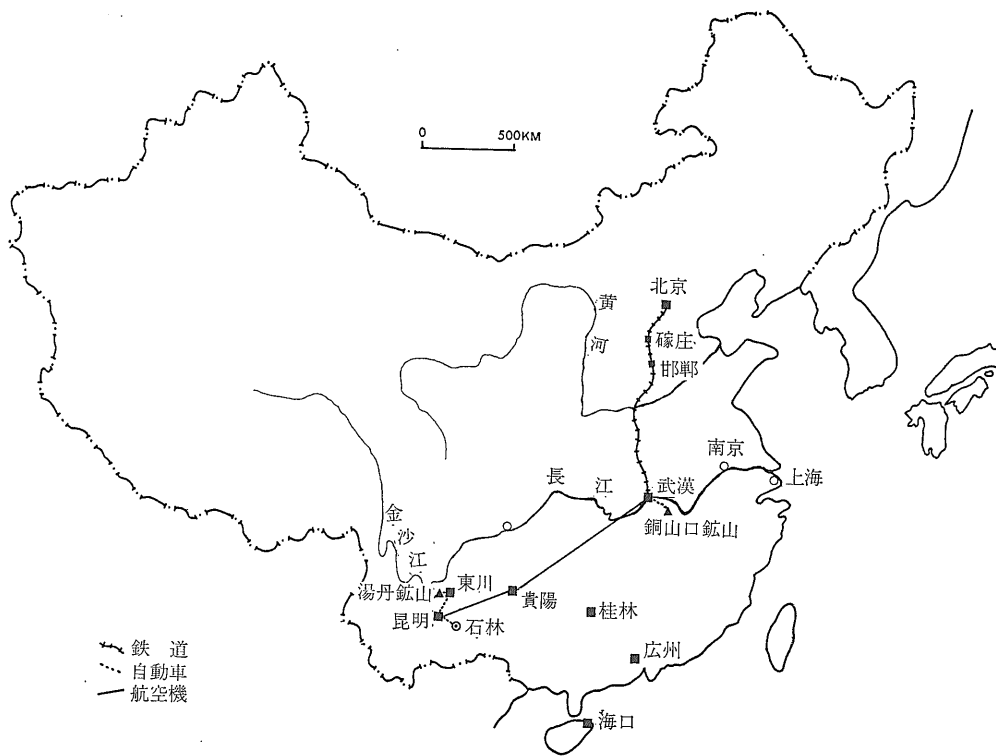
小村 幸二郎（鉱床部）  
Kohjiroh KOMURA

## 常春の都昆明へ

短かい滞在ではあったが はじめて訪れた国で しかも 誕生間近い鉱山をはじめて見せてもらった故か 様々のことが脳裏をかすめ ベッドに横たわる頃には午前3時をとくに過ぎていた。 広大なこの国のあらゆる開発業務は 全国人民代表大会における討議・決議に沿って 積極的に進められていくのだろうが いわゆる開発基地ないし拠点の選択如何では 既に着手されている業務の計画に ある程度の変更は生ずるかもしれない。 それは 未だ十分とはいきれない設備能力や技術者などの適正配置にもとづくこともある。 全体としてどのような流れが理想的かつ現実的であるかを判断することは中々大変かもしれない。

広々とした農耕地を控えた鉱山の人が ぼつつりと

「この鉱山には6000亩（約4平方キロメートル）の農場があり 1978年にはおよそ1000トンの野菜を収穫しました」と話した。 この短かな言葉の中に 自給自足ということの他に いわゆる縦割り組織を見出したように思えたのは間違いだろうか。 日本の地質調査所と金属鉱業事業団と民間会社の現地探鉱事務所等を総合したような性格と目される地質部（省）について 職員の総数は約40万人と 聞いたことがある。 グラスルートの調査からF/R作成までを担当するとはいえ 余りにも職員数が多い様に思えるが よく聞いてみると この数も多いとは決していけない。 地質部には6つの研究所 長春地質学院をはじめ6つの地質学院と 実験機器や探鉱機器等を開発・製作・修理する12個所の機械工場等が所属し 更に 職員の子弟の為の保育園や小学校等の保母・先生もその職員となっており 誕生から一般教育→専門的教



旅行行程図

育→技術者・研究者の育成→地質的基礎調査→探鉱→F/Rの作成 という一連の流れが 地質部の管轄の下で行われているということらしいから それらに直接に関与する人の数は40万人ぐらいにはなるだろう。これは縦割組織の一つの典型的な例であろうし 鉱山開発と従業員の食糧確保のための農業経営も 狭い範囲内のこととはいえ やはり その一つの現れであろう。縦割り組織が絶対に良いとはいきれないだろうが この国の地球科学関係の指向性と現実になしつゝあることを見る時 何故か 羨望さえ覚える。

目覚めまでは僅か2時間の睡眠であった。午前5時20分 空は一面に曇っている。窓から入るそよ風がなぶる故か 武漢に来てから最高に寝やすい朝だが やはり 湿度は高い。6時半に朝食を終えて1時間後に宿舎を後にした。月曜日である。

鉱山関係者と宿舎の従業員達が全員で見送る中を マイクロバスはゆっくりと表通りへ出た。町はまだ完全には目ざめていないのか 静かである。鉄鉱床の露天掘跡を過ぎる頃から 職場へ向うらしい人々の姿を見かけるようになった。2人か3人連れで 1人で歩いている人は意外に少ない。明るい笑顔で話しながら歩くその人達を見ていると 一種の現代病とさえ思われ勝ちな いわゆる月曜病は この鉱山町にはないのかもしれない。この地に来てからのことを振り返ってみると 土曜も日曜も全く休まず 鉱山の人々と歩きそして話し合ったことになるわけだが どうしてか 今日の日曜日だなどということはいぞ考えなかった。慌ただしい旅の故か または この国の人々の習慣に同化したのか その理由はよく分からない。

どんよりと曇っていた空の所々に青空がのぞき そしてそれは みるみるうちに 広がっていった。4日前に通った道とは思えないほど 武昌への道は まぶしいほどに光っている。時折 右手に 長江の流れが見える。泥を含んだこのオレンジ色の水の流れは 一体一日にどれほどの泥を運んでいるのであろうか。途方もない大量の泥水は 遠い昔から それに係わり合って生きてきた人々に 様々の喜怒哀楽を与えてきたに違いない。氾濫しては沃野を造り その沃野に実る農産物を一呑みにすることもあったろう。所詮 治水の術に長けていなければ 大河と共に生きることは難しい。

涼しいうちに武昌に着くため 途中休みなしで突走った。武昌の家並が疎らになる附近にある空港まではおよそ108キロメートル 2時間半である。マイクロバスは予定通り 10時に空港に到着した。

平家建の空港建物は こじんまりとしており 隅々まで掃除が行き届いている。客も多くはなく 実に静かである。順調に事が運べば 12時10分発の飛行機で雲南省の省都である昆明へ向かうはずだが 長江の流れと武漢三鎮の顔に半ば魅せられている心中を神が察してかどうかやら 北京から飛来する予定の飛行機が到着する気配はない。片隅の売店で絵葉書を買ってみた。武漢の風景を主とした10枚1組の絵葉書は 日本円にして約85円であった。静かに 椅子に腰をおろして 飛行機を待つ数少ない客の表情が印象的である。いらいらしてせかせかと歩く人は居ないし 足繁く 案内所へ通う人も居ない。10時半を過ぎた頃 北京出発が大巾に遅れ 最悪の場合はキャンセルかもしれないという情報が入り ひとまず 漢口の武漢江漢飯店で休息することになった。北京から武昌までの飛行時間は約4時間半なので 少なくとも 昼食をはさんで3時間ぐらいは休息できる。

武漢江漢飯店のロビーには 多勢の観光客が居た。英語のグループ フランス語のグループ 中国語のグループと 様々である。割当てられた2階の部屋の温度計は27°Cを示している。4日前よりは8°Cも低いが午後になれば軽く35°Cぐらいにはなるのだろう。

午後2時過ぎ 飛行機はまだ北京を出発していないという連絡が入り 漢口の中心街にある友誼商店を訪れることになった。友誼商店 (Friendship Shop) は外国人だけが利用できる店で 主な都市には必ずあるらしい。漢口の友誼商店は百貨大楼 (デパート) の一隅にあった。古い美術品から文房具にいたるまで 多種多様の物はあるが 素晴らしいと思う物はやはり値がはり かさばる物が多い。結局 1時間ばかり見物して ホテルへ帰ることになったが デパートの一般の売場はかなり混んでいる。客の殆んどが何かを買うとは思えないが この人混みも活力の一つの現われであろう。

3時50分 北京との電話連絡では 6時頃には飛行機が出発する予定だということであったが 5時45分になって 飛行中止が判明し 思いもかけず 漢口で一泊することになった。武昌から昆明まで汽車で行く方法もあるにはあるが 武昌発午後7時30分の汽車が 2日後の午後1時30分に 42時間かかって昆明に着くことを考えれば むしろ 漢口で飛行機を待つ方が得策であるが先を急がない独り旅ならば きっと 汽車に身を托しただろう。湖南省の省都である長沙から 南へ迂廻して広西壮族自治区を通るコースは 美しい景観の桂林から柳州を通り 貴州省の省都である貴陽 (陽) で 北コー

スに連絡する。桂（日本では金木犀）の深い緑に散る黄金色の美しい花が放つ馥郁たる香りに包まれる桂林市は瀕江の流れと山景の美で世界屈指の景勝地として知られている。晩夏に散る桂の花は風になぶられて瀕江の流れに身を任せるのであろうが下流へ向って桂江西江そして珠江と名を変える瀕江の水面に浮ぶのはどの辺りまでだろうか。天下の美景も厚い雲におおわれて機上の人にはその姿を見せてはくれないことだろう。予期せぬ漢口の夜だが久しぶりの焼そばを混じえた夕食に満足した後すぐ近くの映画館へ足向けても満席で入れず本屋も見当たらず早々に戻って部屋にとじこもることになった。

いよいよ武漢を去る時がきた。夏の最中武昌から漢陽へ故毛沢東氏が老軀を挺して泳ぎ渡ったという長江は今日も強い陽射しを浴びてゆったりと流れている。美しい東湖に屈原の純な魂を想い悠々と流れる長江の水に遠い昔からの忍従と波乱に満ちた歴史の巨大な流れに翻弄されてきた人々の真に生きる喜びに満ちた日々を祈る時何故か武漢の地を去るのは忍び難い。

12時36分 離陸後間もなく武漢の家並も長江の巨大な流れも視界から消えた。前の方の座席は恐らく好意的に確保されたのだろう。白い半袖のブラウスにグレイのズボンを着たスチュワーデスが熱いお茶と袋入りのキャンディと扇をサービスしてくれた。やや大きめの湯呑茶碗は淡い藍色の模様の陶器製である。初めて乗る中国民航の飛行機それもこの国でいわゆる瀬戸物の産地として最も有名な江西省の景德镇に割合に近い地域を飛ぶということでこの湯呑茶碗はもしかしたら 螢焼ではないかと期待したがそうではなかった。原料に米を入れて捏ね整形して窯で焼くと米は消失する。それから釉薬を塗って焼上げると米が抜けた部分だけはわずかに光を通して螢が飛んでいるように見える。元来 螢焼はこの様にして造られたという話を聞いたことがあるが現在もこのような手法で造られているのであろうか。後日北京で見た螢焼の器には同じ大きさの螢が同じ間隔で飛んでいたがこれを完全に手工業で造るのは容易ではないように思えた。

キャビンと操縦室とを隔てる壁に 服務心得を箇条書にした木板が掲げられている。その一部に「為人民服務」という言葉がある。この標語と「工業学大慶 農業学大業」という標語はよく見かけられ国民こそってお互いの為にそして現代化の為に尽力する意欲の表われ

と思えるが一方 余りにも度々見せつけられると多くの人々の気持がこれらの標語とはかけ離れているからこそ必要なかもしれないと思える。人間の気持というものは不思議なものでありそして物差しで計れるものではない。

全く切れ目のなかった厚い雲が少しづつちぎれてきた。その隙間から見えるのは深い緑におおわれたかなり峻しそうな山々と深い谷である。3時を過ぎる頃一かたまりの家並が見えた。飛行機が機首を下げやや速度を落していることから察すると貴州省の省都である貴陽(陽)である。それからおよそ5分後に着陸した。かなり大粒の雨が降っている。海拔およそ1200メートル 気温19°Cのこの空港は貴陽からおよそ32キロメートル離れているらしい。空から見る貴陽は緑の中に立体的に広がる美しい町のようなのだ。ここには地質図等の刊行でも知られる地球化学研究所があり地学関係者の訪問希望の多い所ではあるが今回の旅行では訪れる時間的ゆとりはなかった小走りに入った空港待合室は多勢の人でざわめいていた。備付けの椅子にゆとりはなく立ちつくす人の数は相当なものだ。待合室の左手奥にガラス扉で仕切られた静かな一角がある。そこは広々とした空間にベージュ色のソファが並ぶ外国人用の待合室であった。紺色か緑色の上・下を身に着けたお嬢さんが甲斐甲斐しくお茶をサービスしている。足音を忍ばせ大きな湯呑をテーブルに置く音さえたえずさわやかな微笑を残して立去るお嬢さん達の実に落ち着いた心のこもるサービスの行き届いている空港である。

広い待合室の片隅に一かたまりの人がいる。近づいてみるとそこは主として菓子や飲物を商う小さな売店であった。客の多くはキャンディを買っている。多分子供達への土産であろう。化粧函にリボンをかけた土産ではないが袋入りのキャンディを大事そうに持つ人を見ているとほのぼのと嬉しさがこみ上げてくる。小さなショーウィンドに航空便の時刻表がある。真紅に金色の鳳凰をあしらった表紙のこの時刻表は国際線と国内線の時刻と飛行コースを網羅したものだが価格はおよそ14円である。

待合室は次第に混んできた。北京や武漢と違ってその人達の顔つきや体型や服装が多様なのはいろんな民族の人達がいることを示しているに違いない。恐らくこれから雲南省をはじめとする西部山岳地帯へ向ってこの国の人口のおよそ94パーセントを占める漢族は少なくなりいわゆる山岳民族が増えてゆくのであろう。

因みに貴州省に居住する主な民族はイー族・チュアン族・ヤオ族・シヨイ族・コーラオ族・トン族などである。

同行の通訳が心配そうな面持で人混みを分けてやって来た。昆明から来た客の話では昆明は大雨で着陸できないかもしれないということだ。山岳地帯を飛ぶのだから大雨だと聞かされるとおだやかな気持には決してなれない。しかしそれから間もなく出発のアナウンスがあり窓越しに墨絵の山水画の様に美しく見える風景に名残りを惜しみながら雨の中を飛行機へ向った。

ベトナム社会主義共和国と国境を接する雲南省の省都昆明へ向う故か解放軍の兵士が20人ばかり乗込んできた。緑色の服と帽子に真紅の襟章と帽章階級を示す様な特別なマークらしいものは見当たらないし軍人らしくきりっとした身なりではない。皆が若く色白でおとなしそうな兵士ばかりだが強靱そうにも見えないそのほっそりとした身体のどこに強烈なエネルギーやバイタリティが秘められているのだろう。

4時35分北京へ向う立派なジェット機をいささか羨やましく思いながら昆明へ向う小柄で少々色艶の褪せた私達の飛行機は離陸した。貴陽空港はまたたく間に遠ざかっていった。雨は止んだらしく遮るもののない視界には青空が広がっている。全く揺れもせず貴陽空港での心配がまるで嘘のような快適な飛行である。緑にすっぽりとおおわれた峻しい山が連なりその連なりが造る深い谷に濁流を湛えて蛇行する川が見える。峻しい山々が生み出す景観は美しい。しかしその美しさ故にこの国が求め続けている糧の温床とはなり難い。遠い昔から厳しさに培われてきた人跡稀な自然の雄大な美景を目のあたりにした時人は其処を秘境と呼ぶことがある。そしてその美しさに魅せられて再び訪れる日を願う人もいるだろうがその秘境に切なく生きているに違いない人々と接して文明の利器に恵まれながら日々を送っているその人は一体何を思うだろう。人間とは人に幸多かれと願う半面自分自身以上に幸多い人を妬むところのある不思議な生物であるらしい。

貴陽を出発してから1時間10分鮮やかな緑の中をオレンジ色の道がぬり昆明に到着した。貴陽を出て間もなく止んだ雨が降っている。

大粒ではあるが雨脚は速くはない。飛行場にかなりの水溜りが見えることから察するとやはり貴陽空港で聞いた通り昆明は強い雨に見舞われたに違いない。海拔およそ1500メートル気温15°C7月半ば頃とは思えない肌寒いほどの午後5時45分であった。

空港から出迎いのバスで約20分市の中心からやや東にはずれた所に建つ中国国際旅行社昆明分社に到着した。外国人の客の殆んどがこの宿舎に泊るのだからかなり規模の大きな宿舎ではあるが混んでいるとみえて一部屋に2人が泊ることになった。年間平均気温16°C人口およそ90万人の高原都市昆明は年間を通じて温暖な気候に恵まれていることから「常春の都」とも呼ばれ「春城」という別名をもっている。

### 活断層の谷に沿って

早朝の昆明は肌寒いほどである。午前5時に目覚め足音を忍ばせて表へ出てみた。勤めに出る家庭ではもう朝餉の仕度が始まっている筈だがその気配は伝わってこない。明けきらぬ並木の道を2台の自転車が寄り添うように通り過ぎて行った。

7時に白粥の朝食を済ませ8時に宿舎を後にした。道は自転車の波のざわめきに包まれている。しとしとと降る小雨が一直線の道路と並木を一幅の絵にする風景は捨て難い。大通りから郊外への道路に入った途端に交通量は少なくなった。一段と激しく降る雨に打たれる蓑笠姿の農夫達がいる。横一列に並んだ蓑笠は激しい雨に動じる気配もみせず同じ早さで進んで行く。恐らく草取りに熱中しているのであろう。

嵩明を過ぎて間もなくゆるやかに起伏する丘陵地帯に変わった。今まで続いていた水田は姿を消し畠が延



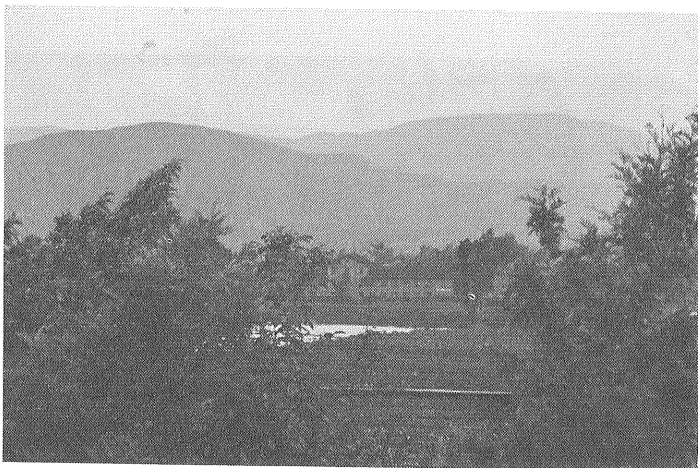
雲南省の省都 昆明市の中国国際旅行社昆明分社  
マイクロバスは旅行者用



小江断層に関係して生じたと思われる地入り  
小江断層は手前の山と後方の山岳地帯（雲貴高原）との間の低地帯を通過している

延と広がっている。しかし北へ向うにつれて農耕地の幅は次第に狭くなってゆくようだ。この農耕地帯の東側に走る雲南省と貴州省との州境をなす雲貴（ユンユイ）高原とチベット高原から続く西側の峻しい山地との間隔が次第に狭まっているのであろう。東・西のこの両山地に挟まれた低地は南では広く北へ向って低い丘陵地を挟みやがては深いV字状の谷に移り変ってゆく。

深くぬかるむラテライトの畦道を 幼児の手を引き水牛の手綱をとる若夫婦が歩いている。ゆるやかにうねる畠は緑におおわれている。真直ぐに立ち並ぶポプラに似た巨木の群 ぽつんぽつんと建つ農家 その背後には雲に覆われて全貌を見せない峻嶒が迫っている。余り大きな農家は見当たらないようだがこの付近では人



東川市から西方の山岳地帯を見る  
右後方の一段と高い山岳地に東川式銅鉱床が分布している

民公社の活動は余り活発ではないのだろうか。丘を登りつめる頃 マイクロバスは徐行しはじめた。道のすぐ傍の狭い水溜りの中に水牛が2頭 すっぽりと身体を沈めている。毛穴を持っていないため発汗できない水牛は 体温を下げるため 水中に身を沈める習性もっているが 全く汗をかかないどころか 肌寒いほどの雨の中でさえ 水に入らなければ体調を保てないほど体温が上がるのだろうか。常識では考えられないような 道徳心に欠けた言動に満ちている現在の世相の中で もしも人間に毛穴が無かったならば 恐らく 目を背けないではいられないようなことが後を絶たないことだろうが しかし 己の欲望に負けて 他人の迷惑など全く考えず 必要以上に水を飲んで傍迷惑なほど多量の汗を流す輩もいれば 一方 必要最小限度の水を飲むこともままならないがために汗を出したくても出ないまま我慢している人もいる。「人間は平等に生きる権利と義務をもつ」とか「互惠平等」などの名文句を創造した現代の世の中に こうしたことが日常茶飯事のように行われていることを完全に否定できる人は恐らくいないだろう。

曲りくねった道が直線道路に変る付近で 2人の男が山肌を削って道路を拓いている。谷に面した路肩は崩れ落ちている。ラテライト化の進んだ所では この様なことは絶えず起るのだろうが 特に 今辿っている道路が北へ向うこの地域で唯一の道路とあっては この様な作業は欠くことができない。目には見えないものの強大な自然の力と人間の智恵との闘いは 一体 いつまで続くのだろうか。

黒一色の服を着て太いパイプをくわえた男が 鋤を担いでやってくる。割合に小柄で筋肉質らしい体軀と余り艶のない顔付とから 一目で山岳（高地）民族と判る男である。雲南省だけでも21を数えるといわれるイ族の一部族の男であろう。例えば タイ北部の山岳地帯を居住区とするメオ族の男と見分けがつかないほどである。それにしても 山岳民族が一般的に小柄なのは何故だろうか。アフリカ中部の熱帯雨林地帯には身長が150センチメートルにも満たないピグミー族と呼ばれる矮小民族がいる。しかし ピグミー族は 元々矮小な肉体の

主であったわけではなく 同じくネグリロ黒人種に属する他の部族と同じ様な普通の体軀の持主ではあったが長い年月にわたる密林での生活によって環境順化し現在の様な体軀に変ったといわれている。 あるいは同じ様に密林を生活の場とするマレー半島のセマン族やルソン島のアエタ族なども矮小民族として知られている。 もっともアフリカのピグミー族とアジアの広義のピグミーに含まれる矮小民族とは身体つきは著しく異なり前者は腕の長い短足ずんぐり型 後者は大体均整のとれた身体つきをしている。 余り大柄ではなくかつ瘠身であるという共通性をもっている山岳民族は ピグミーと同じ様に 環境順化の一つの例になるのだろうか。

功山を過ぎる頃から 谷に面する山腹に 地氾りの跡が目につくようになってきた。 そして 地氾りの爪跡は 北上するにつれて より多くかつ規模が大きくなってゆく。 この国を訪ずれる前に地質構造図を見て気がついたことだが この付近は 貴陽の東部地域と同様に大規模の南北方向の断層が群生している この国の代表的な地域である。 これらの地氾りも 恐らく 断層と関係して発生したのであろう。

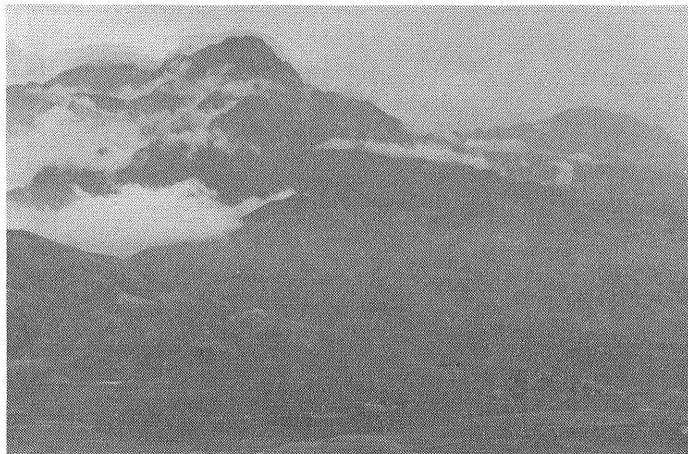
真北へ向う谷に沿って昆明を出発してからおよそ5時間40分の後 背後に海拔4200メートルの古牛塞山が迫り前面に小江の流れがある東川市に到着した。 ここから更に北へ向って70キロメートルばかり行くと 長江の上流に当たる金沙江に出るが そこまで行く時間的ゆとりはなく マイクロバスは右折して 市街を一望する高台の東川市革命委員会第一招待所に到着した。 人口24万人海拔1250メートル付近の山麓に立体的なたたずまいを見せる東川市は雲南省北部最大の都市である。 清潔で広い食堂や応接間のある2階建のこの招待所では 多勢の人が出迎えてくれた。 かなり前から仕度されていたらしい 心のこもった料理や飲物が 純白の綿布をかけたテーブルに並べられた。 朝食が早く 長距離を車で揺られた故か 特に美味い。

直線的に走る小江を隔てて 西側に高い山々が連っている。 その頂上付近が今日の旅の目的地だが 雲におおわれて容貌は全く判らない。 食後間もなくその目的地を目指して 招待所を後にした。

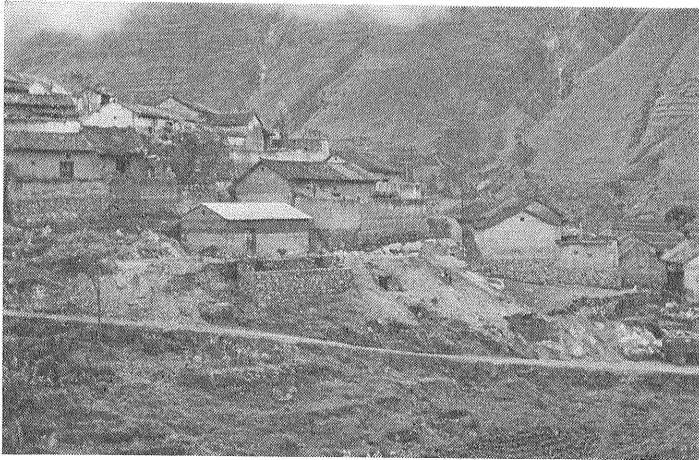
小江を渡って登り切った丘から 東川

市の背後に迫る古牛塞山(4200メートル)が見える。 山麓は比較的ゆるやかな地形だが 頂上付近はいやにごつごつした感じで 地質の相違による地形の差異をよく示している。 荒れた感じの頂上付近の岩石は玄武岩である。 昆明へ通じる鉄道を越える頃 道路傍でバラス作りに精出す人達を見た。 最近の日本では 岩肌を爆破し 破砕機で砕き そして篩分けして好みの大きさのバラスを作ることが多いが ここでは 以前の日本で見られたのと全く同じ作業が行われている。 手で運べる程度の石を拾い それをハンマーで叩き割り サイズを揃えて サイズ毎に山積にしてゆく方法である。 よく見ると バラスを作っている人は殆んど女性か子供である。 休日でもなければ放課後とも思えない時刻なのに子供達は 一心に ハンマーを振っている。 一定の品質を保っていることが バラスとしての基本的条件の一つであることからみれば この子供達は 日々のバラス作りを通して 経験的に岩石の見分け方を習得しているのかもしれない。 小学生かせいぜい中学生としか思えない子供達が 勤労意欲を持って仕事を手伝い 或は精出すことは尊いことには違いないが 学校で学ぶ時間を割いてこの仕事に精出さなければならぬとしたら 考えさせられることは多い。

曲りくねる道がぬる々しい山腹の所々に 泥壁造りのように見える家の群と その背後に深くそして高く抉られた地氾りの跡がある。 余り広くもない畠をもつ小さなこれらの部落は のどかに見えはするが もしも 裏山が大地氾りを起こしたらどうなるのだろうか。 初めて見る風景や物に関する興味は 次々に 様々な想像を生んでゆく。 東川を出発してからおよそ45キロメートル



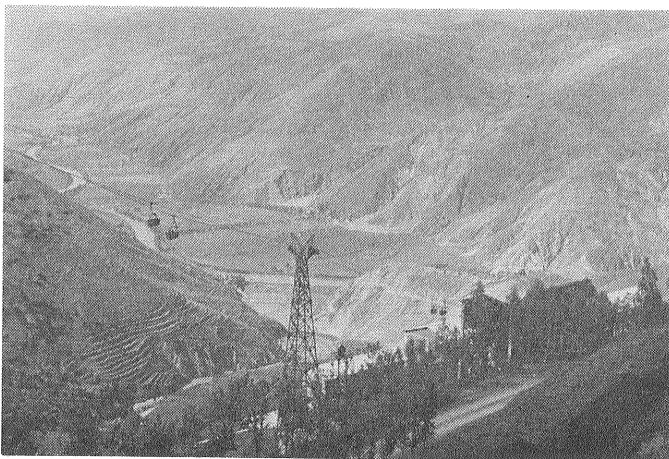
東川市の背後に連なる雲貴(コンコイ)高原の古牛塞山(4200メートル) 大部分は玄武岩らしい



湯丹（タンタン）へ向う途中の部落背後の地蔵が無気味である

2時間を費やして 目的の山頂の村に到着した。 峻しい山とその頂に軒を連ねる家並とが仙境を髣髴させる山奥の里である。 マイクロバスが到着した広場には 200人を越えるほどの人達が待っていた。 恐らく日本人が初めて来訪することを知って集ったのだろう。

広場から石段を下りた所に建っている木造2階建の宿舎は中々立派である。 2階の広い洗面所は理髪室を兼ねている。 居室の窓際には真白のテーブルクロスをかけた大きな文机があり 机上にはラジオと可憐な花を生けた花瓶の他に この国の煙草の中では最も上等とされている「中華」という真紅の函の煙草とマッチを添えた灰皿が置いてある。 ソファの前のサイドテーブルには湯ざましの冷たい水のポット 熱湯の入ったポットにお茶と湯呑があり 隔々にまで細かな心づかいが行き届



湯丹鉱山の索道  
銅精鉱はこの索道で 写真中央の川に近い駅（昆明からの終着駅）へ運ばれている

いている。 遠来の客を迎える山里の人達の温かいもてなしの始まりである。

扶れたように深い谷はもう闇の中である。 遙かな古牛塞山は 頂上付近を雲におおわれてはいるが 黒々とした男性的な姿態を見せている。 昆明から北へおよそ228キロメートル 峻しい山腹の曲りくねった道を喘ぐように登ってきたというのに 意外にも この山頂の村と昆明との比高は1000メートルに過ぎない。 一通りの紹介が終り 一風呂浴びた後 歓迎の宴が始まった。 公的行事の一つとしての食事のためか 雲南省の名物料理の一つとされている納豆料理や夫を想う妻の愛情が生み出したといわれているクオチャオミエンは食膳にはなかった。

古牛塞山が晴れ渡る天空を背にしてくっきりと姿を見せる。 美しい暁を迎えた。 しかし その姿を愈々しに見ているうちに 薄雲が広がり 間もなく 今にも泣き出しそうな空模様に変った。

宿舎を出る頃に とうとう雨が降り始めた。 長靴にゴムの合羽を着て 海拔2600メートルの幅1メートルにも満たない道を行く。 路面に見える薄紫色の粘板岩が消え 妙にごつごつとした岩石に変った。 右手のやゝ低くなった所では この両者の境は直線的できわめて明瞭である。 やがて このごつごつとした岩の延長上にまるで墨で画かれた山水画に見る様な そそり立つ岩山が見えてきた。 山腹の傾斜はおよそ75度 部分的にオーバーハングしているこの岩山は 世界に知られる東川型銅鉱床の一端を秘める石灰質の岩石で形造られていた。 雨に濡れた岩肌は沁りやすく 一步踏みはずせば 200メートルぐらいは転落しそうである。 この地域の鉱床は500年以上も前に発見されたといわれているが この峻しい山岳地帯を 恐らく人家も道らしい道もなかったに違いない昔 鉱床の発見を目的に歩き廻った人がいたのだろうか。 山道が跡絶えた所に ぽっかりと 坑道が口を開けていた。

いわゆる東川型(式)銅鉱床に関する記載を読んで 一体どういう鉱床なのか判断に迷う人が少なくないに違いない。 或るも

のには層状銅鉱床と書かれ 又或るものには層状をなす熱水鉱脈と書かれ 接触交代鉱床と記載されているものもある。一般に情報の乏しいところだけに この様な理解の相違が生ずるのであろうが 単的に言えば 鉱床の性状に関するこの様な記載の相違は 東川型銅鉱床と東川地域の銅鉱床とを混同しているために 生じているように思われる。一般に層状の銅鉱床として知られている東川型銅鉱床は 主として 原生代上部の昆陽層群のドロマイトを主とする厚さ380~450メートルの落雪層中に胚胎する。東川地域では この型の鉱床の他に 褶曲裂力を胚胎の場とする鉱脈型の銅鉱床や塩基性岩中の鉱脈型銅鉱床など 幾つかの型の銅鉱床が発見されている。このように 東川地域には成因の異なる銅鉱床が分布しているために 乏しい資料にもとづく判断では先に述べたような記述の相違が生ずるのであろう。鉱床の型によってその探査や開発に要する経費が著しく異なることなどからみても 尾に触れて巨象を想うようなことは避けた方がよさそうである。

高い山の連なりは この付近を北端部として 北方へ向って海拔700メートル前後の山地に変わり そして金沙江の流れで遮断される。これから北部は 麻婆豆腐でも知られる刺激の強い辛口料理で著名な四川料理の本場四川省である。真冬には零下16度以下に下る地区もある 東川付近の主要鉱床分布地域は 東西方向の背斜部に当たり 南北系と東西系の断層に囲まれ およそ660平方キロメートルの面積を占めるといわれている。それらの断層の代表的なのが直線的に走る小江と密接な関係をもついわゆる小江断層であるが この断層は活断層であると聞かされた。

雲南地域の構造運動の中で最も有名な普寧運動は 小江断層の最初の運動を誘発したといわれている。昆明近くの普寧に因んで名付けられたこの運動は古生代に起り 小江断層とこれに関係する東西系の断層とによって上述の地域は相対的に上昇し 次の加里東運動の時期に下降し そして中生代の海西運動の時期に再び上昇をはじめ 現在では 下降を続けているようである。小江断層の転位量はよく分からないが 或る人の話では 現在東側が相対的に1,000メートル以上も上昇しているが 水平的な動きは1,000メートル以下らしい。

遠い昔に起った小江断層の発生という事件は今も尾を引いている。延長およそ250キロメートルに及ぶ小江断層に係わる大地震は 過去100年間に3度起っているが その最も新しい地震は1966年に起った震度9 (日本の地震々度区分の6に相当) の地震である。この地震で

は 急峻な山腹を背にした部落が一瞬のうちに押し流され30余名が死亡するという悲しい出来事を招いた。小江断層が生き続け エネルギーを貯える限り この様な出来事は今後も起りうる。地割れや地じりの爪跡も生しい峻しい山腹にも その山の頂にも 鉱山開発や農業開発に係わり合って生きてゆく多くの人達が居る。その居住区の選定には もちろん 最大限の安全性が基本となつてはいるのだろうが 日頃そうした無気味な自然の爪跡に接することの少ない人の目には やはり 一抹の不安が宿る。

東川地域の銅鉱床が 古くからこの国で最も重要な銅の供給源であることは比較的に良く知られているようだが その鉱量の80パーセント以上が解放後に獲得されたことは余り知られていないのではなからうか。峻しい山岳地帯の長期間にわたる勘探隊の人達の苦労は並大抵ではなかったろう。少なくとも 美食を常とし 燈灯し頃を迎えてネオンの巷に美酒を求めてさまよう人には 勘探隊の仕事は務まらないかもしれない。その苦労が実りつつある今 山頂の村の人々は新しく開発されようとしている鉱山からの出鉱の日を待ち侘びているに違いないはずだが この村が真の鉱山村となる日はいつだろうか。延々と続く露頭 切り立つ山 大規模な活断層を近くに見るこの山岳地帯での鉱山開発には 技術的問題を含めて 十分に検討されるべきことがたくさんあるように思え 単に地質の面だけではなく 興味もたれる。

午前8時過ぎ 宿舎裏の広場には 到着した時と同じように 多勢の人が集っていた。山頂の村との別れの朝である。ここに到着以来 写真機を持ち歩くことが許されなかったことがいささか心残りである。軍事施設や放送局などがあるわけでもないのに 何故写真撮影が許されないのだろう。隣国との国境にやや近いことは確かであるが 多勢の人々が心一つにしてきたことが実を結ぼうとしている姿を この旅行のアルバムにとどめることができないのは残念である。

鋭い山の端に出る月を見ることもなく そして その果に沈む燃えるような大陸の落陽を見ることもなく 昆明への車は 人垣を分けて広場を発った。すっぽりと雲におおわれた山里の曲りくねった道にはガードレールも そして 行き交う車もない。突然視界が開けた。深いV字谷を落ちてきた水は もう岩を噛み砕く力もなく ゆったりと流れている。澄んだこの水はささやかに耕地を潤しながら北へおよそ70キロメートル流れて



金沙江に注ぐが その清らかさは 金沙江の濁流の中に消えてゆく。 清らかな水は汚れた水に合流して汚れた水は清らかな水に合流してこれを汚す。 ごく当り前のこのような自然の営みは 人間社会の営みとよく似ているように思える。 川岸に近い路傍で 子供達は今日もバラス割りに専念している。 目の前をバスが通り抜けても手を休める気配はない。

東川市を眼下に望む峠に着いた。 古牛塞山は厚い雲の中である。 往路では気づかなかったが 今 小江の流れを変えて水田造りに走り廻る数台のショベルカーが見える。 水の流れを変えることさえ容易ではなさそうなのに その上 川底の砂利を処理した上に土盛りして水田に造り変えるのは大変だ。 小江の流れに沿ってこの様にして造られた小さな水田が 点在しているが未だ緑は見られない。 雨量の多い時期に小江の水がどの程度増えるのかは分からないが この様にしてせっかく造られた水田が流されてしまうようなことはないのだろうか 山合いの大きくもない谷間で進められている このような作業を見ていると いわゆる「四つの現代化」の中で最も重要視されている「農業の現代化」がいかに積極的に進められているかをうかがい知ることができる。 しかし 10億人に近いといわれる国民の食生活の安定にはかなりの紆余曲折を余儀なくされることだろう。 ちなみに 1957年と1977年の穀物生産量を比較してみると 1.91億トンから2.85億トンに著しく増加してはいるが 1人当りの食糧生産量は 298.3キログラムから 290キログラムへと減少しており 人口増加に見合うだけの食糧増産がなされていないことを暗示する。



活断層の谷として著名な小江では水田造りが進められている 「四つの現代化」の中で最も積極的に進められている 「農業の現代化」の一端を示す風景である

生地が判別できないほど継ぎの当った農良着の男達が やって来た。 何を語っているのか全く分からないが 彼等の笑顔は底抜けに明るく見える。 現在の日本では 継ぎの当った衣服を身につけている人を殆んど見かけなくなった。 物を大事に使おうとか節約しようとかいう言葉を常日頃聞いているもの いわゆる消費は美德であるなどという考え方が尾を曳いているとしか思えない今の世の中では 空しさだけが残る。 清潔であれば良いとされていた往時の姿は失せ 今はむしろ 汚れ物が好まれる傾向さえうかがえる。 全く 世の中とは不思議というか不可解というか 考えも及ばないことがよく起るものだ。

結構人通りの多い東川市街を一気に走り抜け 車は小江沿いの道を走る。 低く垂れた雨雲におおわれて峻険は見えず うすら寒い山峡の道は やがて 荒々しい水の流れて消えた。 急傾斜の谷から鉄砲水で押流された様々の礫が厚く堆積した川底は さほど深くはないが 大きな礫を除去しなければ車は通れない。 素足の女性が 自動車の通路造りに 懸命に大きな礫を撥ねている。 がっしりした身体つきと陽焼けした顔とがたくましさを感じさせるが 冷たい水の流れて沈む素足は驚くほど白い。 恐らく 一日中 水の中に入って仕事をしているのだろうが 身体に障ることはないのだろうか。

昆明へ通ずる鉄道を見下ろす小高い丘の上で昼食をとることになった。 実に美味い数々の料理を作ってくれた鉱山の料理人の 心づくしの弁当である。 1人分づつビニールの袋に入っているパン 焼肉 ソーセージなどは すっかり冷え切ってはいるが やはり捨て難い味がする。 昼食の折 昆明在住の技術者が 「昆明では毎時15分から30分までの15分間 NHK の日本語放送が聞ける」と 教えてくれた。 文明の利器とは誠に有難いものだが その放送がどの程度かを試す機会はなかった。 ぽつんぽつんと降りはじめ間もなく本降りとなった雨が上った道路傍の所々に 何かを手に持って立っている人がいる。 その物の多くは草であった。 山深い雲南省は薬草やお茶の他に草が多く取れる所でもあるらしい。 自動車も人もあまり通らなさそうな雨上りの道で この人達は何時間ぐらい立っているのだろう。 午後4時30分 昆明の宿舎に到着した。 今日にはさらに客が多いらしく やはり2人部屋である。



昆明市のメインストリート  
美しい並木と落ち着いた建物とが見事に調和した清潔で静かな町である

### 昆明と石林

黄昏近い昆明の中心街は 勤めを終えて帰路につく自転車の群で かなり混雑している。 広い道路 美しい並木 落ち着いた建物の多いこの町は 安らぎを与える風情を備えている。 恐らく 古くからの伝統が受け継がれ メタリックでひ弱な感じを与える高層の近代的建築が見当たらないせいだろう。 正しく古都と呼ぶにふさわしいたずまいである。 中心街の一角に「雲南省工芸美術服務院」の真紅の文字を掲げた建物がある。 その建物の片隅にある 外国人向けの商品を売る「友誼商店」に入ってみた。 売場面積は狭く 品数も少ないのは外国からの訪問者が少ないからだろう。 もっとも昆明が外国人に門戸を開いたのは1978年6月だから まだ訪問者が少ないのも無理はない。 車窓から見る限り特に興味をひく物は見えないが 三叉路やT字型の道路が比較的が多いことに気がついた。 一般の町造りでは便利な道路の設定が重要な課題の一つとなるはずだが

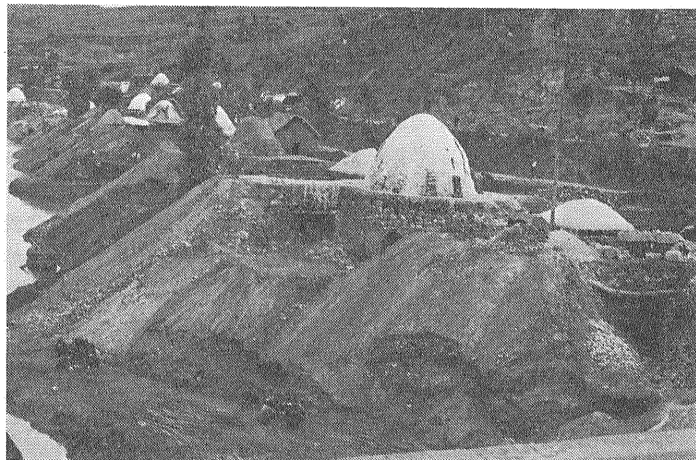
何故 このような道路が多いのだろう。 古くから愛されてきた昆明は そのおだやかな気候と「花城」あるいは「春城」の名にふさわしく 自然美の中に息づいてきたわけであるが 秦漢時代には宋国として栄え 唐時代には南詔国の拓東城 滇時代には大理国の領地となり 元時代以降に中央政府の行政下に入った過去をもつ。 いかにも素晴らしい環境をもち 多種多様な山茶花を代表する花に囲まれているからといって その美しさが自然の姿で保たれるとは限らず むしろ 人間の欲望が剥き出しになる醜い争いの中にあっては その美しさは独占欲をそそることにもなる。 三叉路やT字路が過去の遍歴の中の警戒心の一つの象徴か否かは 全く分からないが いわゆる城下町に残る外敵防御用の道路に似ているように思えないこともない。 古い都には見るべきものが多い。 まして 滇(昆明)湖と山と森とそして雅やかな建物とが織りなす一幅の絵にも似た昆明の風景は 長い間閉されていただけに 訪ずれる人を魅了するに違いない。 しかし今は 清時代の道士呉來清が 29年の歳月にわたり 心血を注いで完成した西山への道を踏むひまもなく 宵闇迫る東風東路を宿舎へ向うしかない。 29年間という長い歳月を唯一筋の道造りに賭けた呉來清の情熱と耐える心は 多くの人に 数々の教訓を残した。 拒むものが大きければ大きいほど それに立向う人の心はよりたくましくなってゆくのが自然の常理である。 しかし 現代に生きる人々の中に 永久に咲き誇る呉來清の情熱と忍耐と そしてこの常理はどれほど生きているだろう。 選ばれて最高の榮譽を得た者が ほんの一時の後には 社会から忘れ去られる運命に陥る例は 現在の世の中ではむしろ当然のこのようにみられる。 地力があればそうしたこともないのだろうが 泡沫の夢と知ってか知らずか その榮譽に憧れるのも人ならそれを与えるのも人 そして そのような世相を作り出す



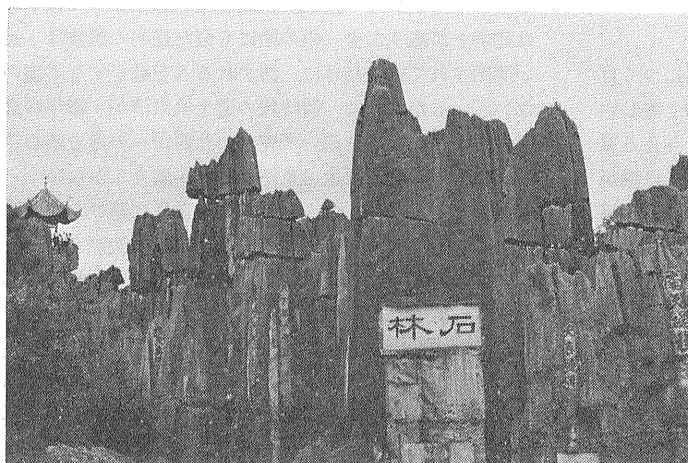
昆明市の中心街 右側がデパート



昆明市の南東方の宜良付近の農村と朝市へ行く農婦 田園地帯に見られる典型的な風景の一つである



宜良附近の煉瓦を焼く窯の列



昆明市の南東方120キロメートルにある石林  
 およそ2億7000年前の石灰岩が浸蝕されてできたもので267平方キロメートルの範囲に分布している 横の線は層理を示す 左の東家は望峯亭



石林の中心部ではおよそ1平方キロメートルにわたって巨大な石灰岩柱が密集している

のも人である。

舎宿のロビー横の大広間では 映画が始まっていた。 観客は 主として団体の観光客らしい。 画面と字幕から見ると どうか 古典的京劇らしい。 映画を見る客が多い故か 食堂は空いている。 比較的 淡薄な味の料理が多い故か 雲南料理は日本人向のようだ。

深々と更けてゆく昆明の夜は 自動車の音が時折聞こえるだけで 全く静かである。

午前8時 宿舎を出発する頃降っていた雨は およそ30分後に止んだ。 昆明郊外に点在する村では ようやく朝市が始まるらしく 荷車を押して来る男や天秤棒をしなければならぬ来る主婦の姿に目につく。 余り変り映えのしない風景が続く故か 運転席の横にあるエンジンカバーの上に毛布を敷いて腰掛けていた運転手の子供が 退屈しはじめたらしい。 5~6才の中々可愛い坊やで 時間がたつにつれて 緊張気味だった顔がほころび 手足の動きが活発になってゆく。 宜良を過ぎて間もなく まるで団栗の実を上向にしたような白い 建物が川べりに並んでいるのが見えてきた。 煉瓦を焼く窯らしいが 製品らしい物は見えない。 出発しておよそ3時間15分の後 昆明から南東へ120キロメートルの石林に到着した。

石林は この国の景勝の一つとして知られ その名の通り 無数の石柱が林立して 壮大な景観を見せている。 およそ2億7000万年前に海底で堆積した石灰岩が度重なる造山運動を経て陸化し 長い間にわたる削剝作用によって現在見られる様な奇岩怪石の集まりを生じたといわれている。 この様な石灰岩はおよそ267平方キロメートルにわたって分布しているが 観光客が訪ずれる最も美しい部分の面積は約1平方キロメートルである。 竹林を過ぎた所に 巨大な石柱が立っている。 人の姿によく似ているその石柱は 何かを語りかけているように見える。 通訳嬢が 「ここは阿詩瑪という映画の撮影が行われた場所



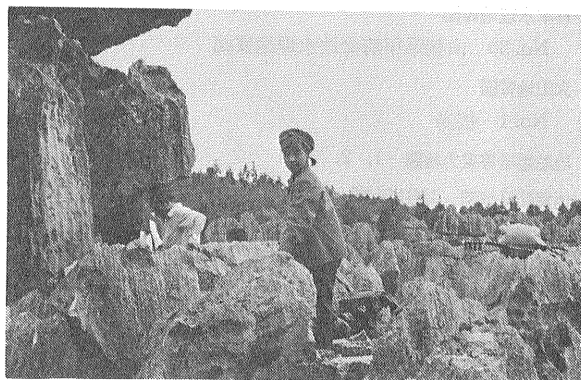
「阿詩瑪」というタイトルの映画の撮影が行われた場所  
左端の石柱は高さ約20メートルで古老の姿に似ている

す」と教えてくれた。阿詩瑪は人の名前だそうだがこの岩の表情から察すると恐らくその映画のストーリーは悲しみに満ちたものに違いない。猫に似た岩象に似た岩 高さ30メートル余もある石柱 自然の造形は全くスケールが大きくそして美しい。「石林」という美しい文字の左後方に「望峯亭」と呼ばれる東家が見える。その東家への道の途中で剣峯と呼ばれる所へ登ってみた。そこには文字通り 剣の刃先のように鋭く上がった石の壁があった。1人がやっと通れるほどのその石壁の上では まだ幼な顔の解放軍の女性兵士が観光客を上手に捌いている。いつまで見ても飽きない光景だが時は迫る。美しい石林湖を左手に見て 心残りの石林を後にした。その心残りを見透かしたように 大粒の雨が降り始めた。雨脚は益々激しくなってゆく。まるで苦しみもがく様に坂道を登っていた車が遂に 立往生した。エンジンカバーに腰掛けていた子

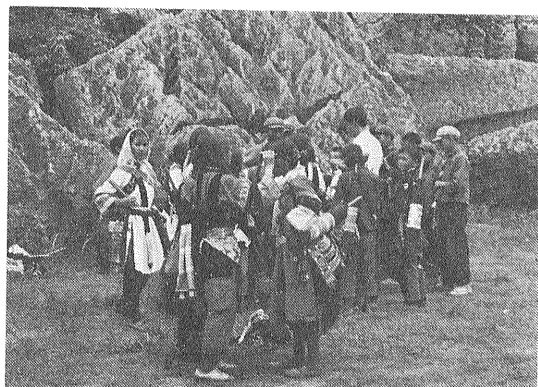
供は 余りの熱さに 後部座席へ移った。運転手は水田の濁り水を汲んでエンジンを冷やしはじめた。止むを得ぬこの応急処置で車はのろのろと動き始めた。昆明着午後7時 往復240キロメートルの自動車旅行をもって 雲南省への旅は終わった。

「雲嶺の南」を意味して清時代に誕生した雲南省は 昆明南方の壮大な滇池に因んで滇省という別名をもっている。面積およそ44万平方キロメートルの大部分を山岳地帯に占められているこの地には およそ20民族 2050万人が生活を営んでいる。風俗習慣が著るしく異なる様々の民族が 山深くしかも広大な土地に それぞれの集落を構えているに違いない筈だが 単一民族が心一つにす

ることさえ容易ではない世相も少なくないというのにどの様にして共通の目的に歩調を合わせているのだろうか。開かれて間もない雲南の旅は 単に自然の雄大さ美しさだけではなく 訪ずれる人に精神的秘境を想わせる。



剣峯の上で観光客の整理にあたる女性兵士



石林で逢った山岳民族  
(イ族の一部族)の子供達  
全員が番傘を背負っているこ  
とから この地域の天気が急  
変することが推察される